



狩野 方伸 (かのう まさのぶ)

東京大学 大学院医学系研究科・医学部 神経生理学 教授

《略歴》

1982年 東京医科歯科大学医学部卒業。1986年 東京大学大学院医学系研究科修了(医学博士)。自治医科大学大学助手、講師、理化学研究所チームリーダー、金沢大学教授、大阪大学教授を経て、2007年より現職。2002年 塚原伸晃記念賞、2005年 井上学術賞、2011年 時実利彦記念賞 受賞。

ポイント!

- 「つながり」をキーワードに「社会脳」についてお話しします。
- 社会的行動を支える脳基盤の計測・支援技術についてお話しします。
- これまでの研究の概要と今後の展望についてお話しします。

近年、大きな社会問題として顕在化している社会集団における個体間の関係性の障害に関しては、健常者における「希薄な人間関係」から、より重篤な精神・神経疾患、発達障害、さらには複雑な社会環境が引き起こす適応障害に至るまで非常に幅広い範囲が存在します。このような人間と社会に関わる問題に対しては、これまで、主に人文・社会科学的なアプローチが用いられてきましたが、その範疇において捉えられない側面が急速に拡大しており、より広い視点からの研究が急務となってきています。一方で、これまでの実験脳科学における研究の蓄積により、大脳新皮質、海馬、扁桃体、大脳基底核等の高次機能をつかさどる脳領域の作動原理と領域特異性についての解明が進み、社会的環境と脳の機能発達との相互作用を解析するための科学的方法論が進展しつつあります。

こうした背景を踏まえ、従来の人文・社会科学的アプローチと相補的な、新たな実験脳科学を基礎としたアプローチを導入し、ヒト及び動物の社会性を生む基盤となる高次脳機能やそれを支える神経回路、そしてそれらに基づき社会性障害の病態生理を明らかにすることが期待されています。特に、神経細胞同士の「つながり」の不具合が、社会性、すなわち人と人との「つながり」の障害の根本にあると考えられており、注目されています。

